

# むぎ の 麦野C遺跡 6

— 麦野C遺跡第11次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1057集

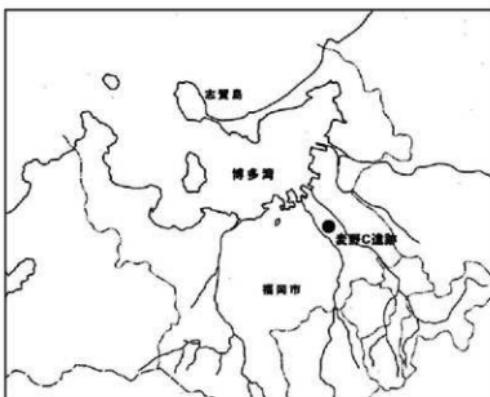
2009

福岡市教育委員会

# むぎの 麦野C遺跡6

—麦野C遺跡第11次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1057集



調査番号 0731  
遺跡略号 MGC-11

2009

福岡市教育委員会

## 序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、福岡中央銀行雑餉隈支店の社屋建て替えに先立って実施した麦野C遺跡第11次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、奈良時代の集落跡が発見されました。竪穴住居跡のなかには、壁面に附設されたカマドがほぼ完全な形で残り、その周りには須恵器壊や甕片が散乱していました。また、床面は厚く粘土を敷き詰めて水平にしていました。このような完全な形で発見された住居跡は、当時の人々の生活を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、福岡中央銀行雑餉隈支店長石塚昭二氏や施工業者の株式会社高松組の陶山英明氏をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

-----れいげん-----

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡中央銀行鍵箱販売店の社屋建て替えに先立って、2007（平成19）年8月23日～9月25日までに福岡市博多区竹丘町2丁目3-2・13他で緊急発掘調査した麦野C遺跡第11次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 遺構は、堅穴住居跡をSC、掘立柱建物をSB、土壙墓をSK、土塹墓をSR、ピットはSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を01から通番してNoを付した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の実測は小林義彦が作成した。
5. 本書に掲載した遺構と遺物の製図は、小林が作成した。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は小林が撮影した。調査区の全景写真是、東西に分割した2区画の全景写真をCG合成した。
7. 本書の執筆・編集は小林が行った。
8. 本書に係わる遺物と記録類は一括して福岡文化財センターに保管している。

調査番号：0731	遺跡番号：MGC-11	分査地図番号：012-0050
調査地點：福岡市博多区竹丘町2丁目3-2・13他		
工事面積：449m <sup>2</sup>	調査対象面積：354m <sup>2</sup>	調査実施面積：294m <sup>2</sup>
調査期間：2007年8月23日～9月25日		

## 本文目次

### 序

I.はじめに.....	1
1.発掘調査にいたるまで.....	1
2.発掘調査の組織.....	1
3.立地と歴史的環境.....	3
II.調査の記録.....	7
1.調査の概要.....	7
2.豎穴住居跡.....	9
3.掘立柱建物跡.....	13
4.土 壤.....	13
5.土壤墓.....	18
6.その他の遺構と包含層の遺物.....	19
III.おわりに.....	19

## 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000).....	2
Fig. 2 麦野C遺跡位置図 (1/6,000).....	4
Fig. 3 麦野C遺跡周辺旧地形図 (1/20,000).....	5
Fig. 4 麦野C遺跡第11次調査区位置図 (1/1,000).....	6
Fig. 5 麦野C遺跡第11次調査区周辺現況図 (1/500).....	6
Fig. 6 遺構配置図 (1/100).....	8
Fig. 7 31号住居跡実測図 (1/50).....	9
Fig. 8 31号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	9
Fig. 9 32号住居跡実測図 (1/50).....	10
Fig. 10 32号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	10
Fig. 11 33号住居跡実測図 (1/50).....	11
Fig. 12 33号住居跡出土遺物実測図 (1/3).....	12
Fig. 13 42~46号建物跡実測図 (1/60).....	14
Fig. 14 1号土壤実測図 (1/60).....	15
Fig. 15 1号土壤出土遺物実測図 (1/4).....	15
Fig. 16 2・3・28号土壤実測図 (1/30).....	16
Fig. 17 3号土壤出土遺物実測図 (1/3・1/6).....	17
Fig. 18 34・38・41号土壤墓実測図 (1/30).....	17
Fig. 19 35号土壤出土遺物実測図 (1/3).....	18
Fig. 20 34号土壤墓出土遺物実測図 (1/3).....	18
Fig. 21 包含層出土遺物実測図 (1/3).....	18

## 図版目次

扉	調査区全景（南より） CG合成	
PL. 1	(1) 調査区西側全景（南より）	(2) 調査区東側全景（南より）
	(3) 31号住居跡・3号土壙全景（東より）	
PL. 2	(1) 31号住居跡全景（南より）	(2) 31号住居跡遺物出土状況（西より）
	(3) 31号住居跡遺物出土状況（西より）	
PL. 3	(1) 32号住居跡全景（南より）	(2) 32号住居跡全景（西より）
	(3) 32号住居跡北西隔壁遺物出土状況（東より）	
PL. 4	(1) 33号住居跡全景（東より）	(2) 33号住居跡掘方（南より）
	(3) 33号住居跡貼床断面（東より）	
PL. 5	(1) 33号住居跡竪横断面（東より）	(2) 33号住居跡竪完掘状況（東より）
	(3) 33号住居跡南北西隔壁遺物出土状況（南より）	
PL. 6	(1) 44号掘立柱建物跡全景（東より）	(2) 1号土壙全景（南より）
	(3) 2号土壙全景（南より）	
PL. 7	(1) 3号土壙全景（北より）	(2) 28号土壙全景（東より）
	(3) 35号土壙全景（東より）	
PL. 8	(1) 34号土壙墓全景（北より）	(2) 38号土壙墓全景（西より）
	(3) 34・41号土壙墓全景（南より）	
PL. 9	出土遺物1（縮尺不同）	
PL. 10	出土遺物2（縮尺不同）	

## 表 目 次

Tab. 1	麦野C遺跡調査一覧	7
Tab. 2	掘立柱建物跡一覧	13

## I. はじめに

### 1. 発掘調査にいたるまで

麦野 C 遺跡の立地する麦野台地は、春日市と境を接する福岡市の南東端にあり、のどかな田園風景が広がる農村地帯であった。明治 22 (1889) 年、この地に九州鉄道の雑駅限駅が、また大正 13 (1924) 年には西日本鉄道の雑駅限駅も開設されて市街化が始まる。この恵まれた交通の利便性によって一帯の田畠は次第に住宅地と化し、一層の市街化が進んだ。ところが、近年は社会環境の変化による市街地の再開発が急速に進み、次第に低中層の共同住宅へと建て替わりつつある。

西鉄雑駅限駅から銀天町商店街を経て JR 南福岡駅に至る道筋には、福岡中央銀行を始めとする銀行や JA 福岡市、福岡南郵便本局などの金融機関やビジネスホテル、商業施設、飲食街が隣接して繁華な街となっている。福岡中央銀行雑駅限駅のある竹丘町 2 丁目は、両鉄道駅の中間点にあたり、銀行 4 社と郵便本局が建ち並ぶ様は、小さな金融街のような感じさえする。

福岡中央銀行では、老朽化した社屋店舗の建て替えを計画され、竹丘町 2 丁目地内における埋蔵文化財有無の照会が平成 19 (2007) 年 5 月 7 日に埋蔵文化財第 1 課事前審査係に提出された。申請地が所在する JR 南福岡駅から西鉄雑駅限駅を中心とする麦野台地は、南八幡遺跡や麦野 A・B・C 遺跡として周知化された埋蔵文化財包蔵地内にあり、周辺地での発掘調査例から奈良時代を中心とする集落域が広がっていることが予想された。そこで、2007 (平成 19) 年 6 月 7 日に原因者立会のもとで確認調査を実施した。その結果、表土層下 60 ~ 90cm で柱穴等が検出され、古代の集落域が広がっていることが確認された。遺跡は現状での保存が望ましいが、建物の設計構造上建築計画案の設計変更は不可能なものであった。そこで、福岡市教育委員会埋蔵文化財第 1 課では発掘調査によって記録保存を図ることとした。建て替え工事は、現店舗の解体と竣工期が決められて建築着工の時間が迫っていることから、早急な調査の着手が望まれた。発掘調査は 2007 (平成 19) 年 8 月 23 日よりはじめ、9 月 25 日に無事終了した。発掘調査期間は厳しい残暑であったが、天候にも恵まれ、作業に従事した方々の協力もあって予定より早く終了することができた。

### 2. 発掘調査の組織

調査委託 株式会社 福岡中央銀行

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第 1 課

文化財部長 矢野三津夫

埋蔵文化財第 1 課長 山口謙治

埋蔵文化財第 1 課調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課 榎本芳治 (課長) 古賀とも子 (担当) 鈴木由喜 (前任)

調査担当 埋蔵文化財第 1 課 小林義彦

調査・整理作業

石橋陽子 伊藤美伸 今村ひろ子 大瀬良清子 坂梨美紀 知花繁代 塚本よし子

土斐崎孝子 西田文子 馬場イツ子 濱フミコ 播磨博子 福田操 松尾千寿

松下さゆり 三栗野明美 森田ちはる 森田祐子 矢川みどり 山口慶子 吉川貴久

発掘調査にあたっては、福岡中央銀行や株式会社高松組などの関係者諸氏にご協力とご配慮をいただいた。協力とご理解に深く感謝申し上げます。

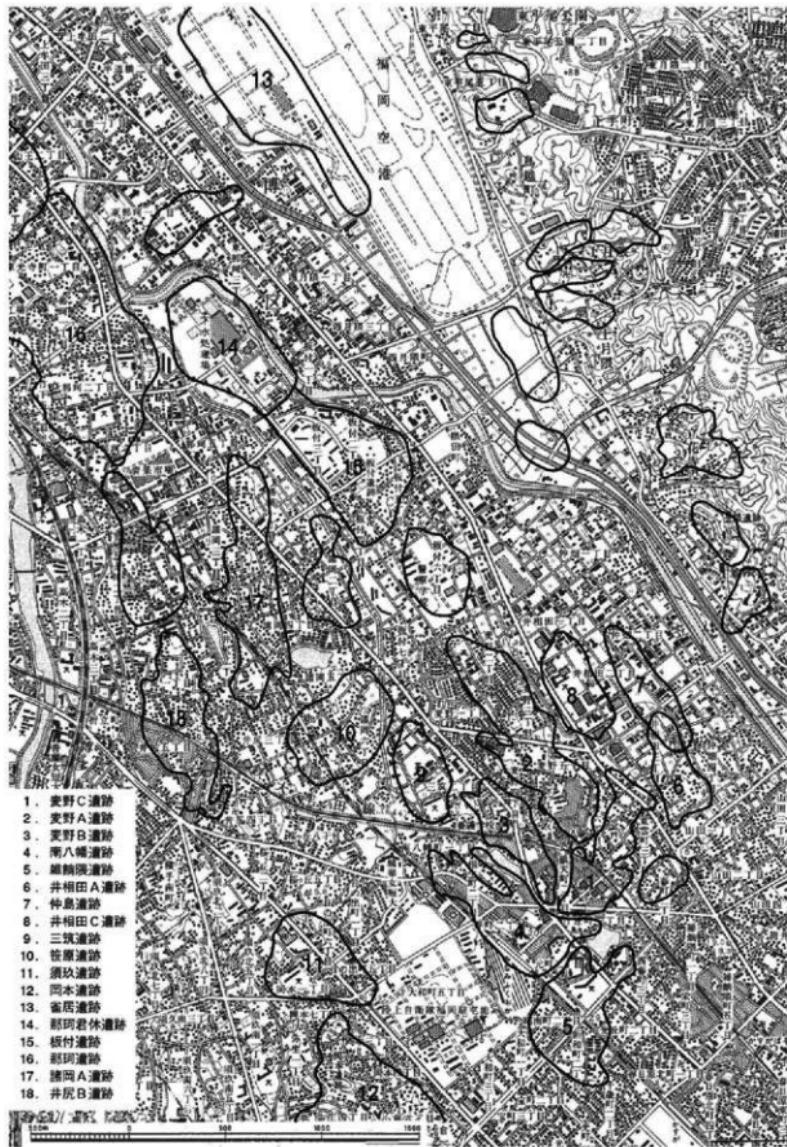


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1 / 25,000)

### 3. 立地と歴史的環境

麦野 C 遺跡は、古くから雜飼と通称される雜飼限にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市のもっとも南端に位置する。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地している。春日丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周辺域には青銅器製造工房跡の須玖水田遺跡や須玖五反田遺跡などが展開している。麦野丘陵は、春日丘陵から北東へ 1km の距離にある。この丘陵は鳥栖ローム層を基盤層とし、諸岡川などの開析による谷が幾筋も嵌入していくかの小さな低丘陵を形成している。この麦野～雜飼限の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して、北から麦野 A 遺跡、麦野 B 遺跡、麦野 C 遺跡、南八幡遺跡、雜飼限遺跡と呼んでいる。

麦野 C 遺跡のある雜飼限の丘陵上でもっとも古い遺物は、旧石器時代の石刃や剥片がある。麦野 A 遺跡 1 次調査区、麦野 B 遺跡 3 次調査区、雜飼限遺跡の 5 次調査区や 10 次調査区で出土しており、台地上の広い範囲にわたって拡がっていることが明らかになりつつある。

次の縄文時代の遺構は稀薄である。麦野 B 遺跡の 3 次調査区や南八幡遺跡の 6 次調査区、7 次調査区で「落とし穴」と推察される土壙が検出されているが、出土遺物が少なく時期を明確にするには至っていない。麦野 C 遺跡 3 次調査区では該期の石軒が出土しているが、晩期の刻目突帯文期にいたるまで明確な遺構や遺物は少ない。

弥生時代になると、遺構は次第に拡がりを見せる。前期は南端の雜飼限遺跡 5 次調査区で、円形住居跡と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落のあった可能性が想起される。また、麦野 A 遺跡 18 ~ 20 次調査区や麦野 C 遺跡 12 次調査区でも貯蔵穴群が検出されており、丘陵の北都城にも拡がっている。中期は、麦野 C 遺跡で方形の住居跡が検出されている。後期には、雜飼限遺跡 5 次調査区や南八幡遺跡 5 次調査区で方形の住居跡が散見されるだけのやや稀薄な拡がりを示すが、南八幡遺跡 9 次調査区ではガラス小玉を伴う住居跡や掘立柱建物跡がまとまって検出されている。雜飼限丘陵では、南縁の三つの小丘陵上で比較的小規模な集落が点的に営まれたものと推考される。一方、墳墓は麦野 C 遺跡 5 次調査区で小兒壇棺墓 1 基があるので集落域に伴う墳墓群は明確ではない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になる。殊に、前期から中期の遺構や遺物はほとんどなくなる。後期には、南八幡遺跡 2 次調査区と 3 次調査区で住居跡が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測されるが、奈良時代の大規模な集落跡との関連については明らかではない。

つづいて奈良時代になると、掘立柱建物群を伴う大規模な集落域が出現する。7 世紀末から 8 世紀はじめには、雜飼限遺跡 9 次調査区で方形に配置された大型の建物跡群が出現する。その規模と配置は官衙的な性格を想起させるものがある。さらに、8 世紀前半から後半に至ると集落域は、丘陵の全域にわたって展開する。南端の雜飼限遺跡では、5 次調査区で 50 棟を越す住居跡が検出されている。また、東側の麦野 C 遺跡では隣接する 1 次調査区と 5 次・13 次調査区では 70 棟にのぼる住居跡群がある。住居跡は、数回に亘って建て替えられ、長期的に集落が展開していたことが推測される。西側の南八幡遺跡でも台地南縁の 2 次・3 次・6 次・8 次・9 次調査区を中心に集落域が展開しており、小さな丘陵ごとに多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雜飼限遺跡や麦野 C 遺跡はその傾向が顕著で、雜飼限丘陵における拠点集落的な様相を想起させる。あたかも「雜飼限」の名が、大宰府官人の雜飼の居住地とか食糧倉庫が建ち並んだ所とする古説に符合するような感がある。

なお、平安時代のはじめになると集落域は急速に縮小する。麦野 A 遺跡の 3 次調査で井戸跡が検出されているほかに柱穴から遺物が散見され、掘立柱建物跡の存在が想起される。



Fig.2 麦野C遺跡位置図 (1 / 6,000)

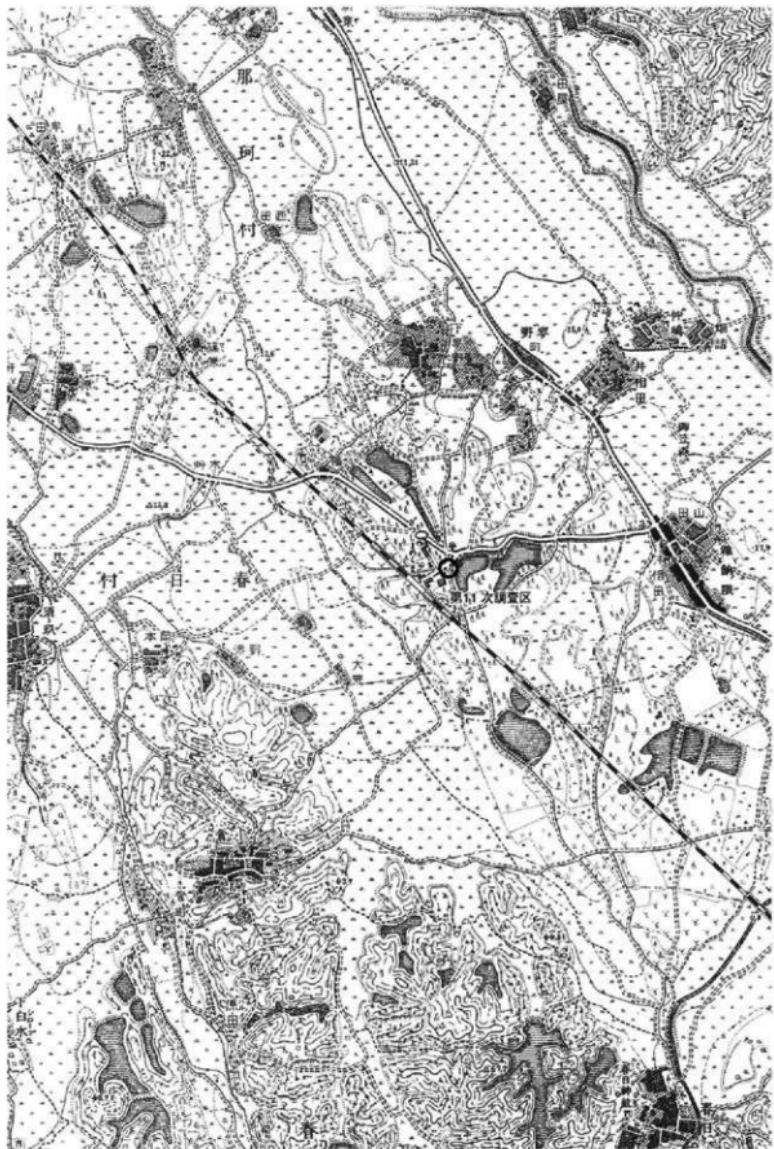


Fig.3 麦野 C 遺跡周辺旧地形図 (1 / 20,000)

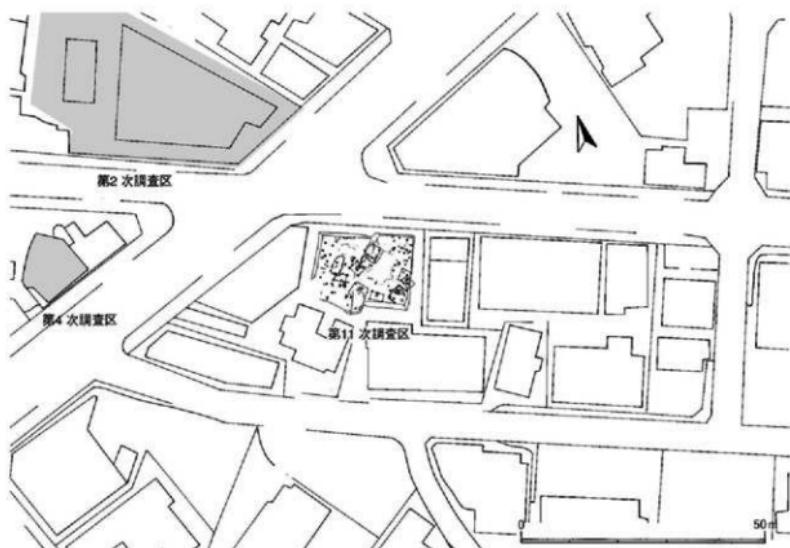


Fig.4 麦野C遺跡第11次調査区位置図 (1/1,000)

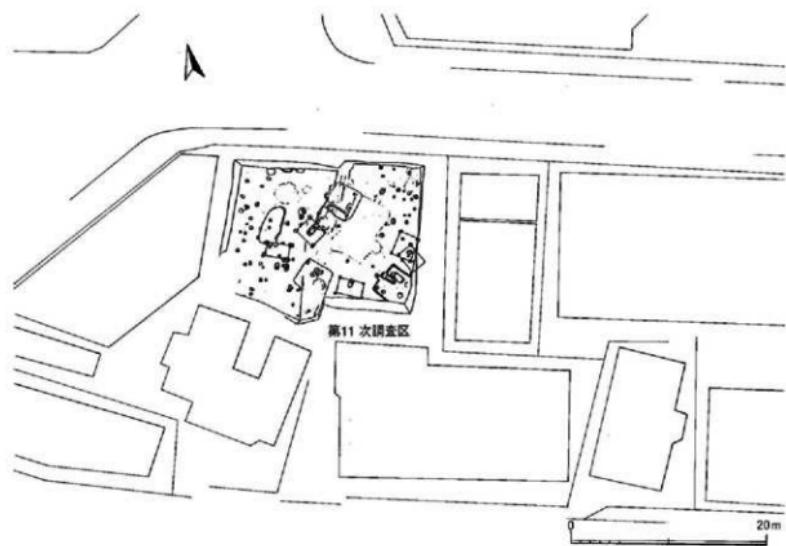


Fig.5 麦野C遺跡第11次調査区周辺現況図 (1/500)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

麦野 C 遺跡は、御笠川の西岸を南北にのびる雑餉隈の丘陵上にある。この雑餉隈丘陵は、導入する開拓谷によって五つの低丘陵に分かれ、その丘陵上には南から雑餉隈、南八幡、麦野 C、麦野 B、麦野 A の遺跡群が縦列的に占地している。麦野 C 遺跡は、この雑餉隈丘陵の東部に位置する東西 400m、南北が 800m の丘陵上に展開する遺跡群で、西線は麦野 A 遺跡と麦野 B 遺跡が、南線は南八幡遺跡が開拓谷を隔て対峙し、東には沖積地が広がっている。第 11 次調査区は、この麦野 C 遺跡南西部の丘陵が東から導入する開拓谷にむかって緩やかに傾斜する丘陵の南端に立地し、谷を隔てた南面には東西に延びる南八幡遺跡群が対峙している。麦野 C 遺跡では、これまでに 14 地点で発掘調査が実施され、丘陵上～緩斜面にかけて 8 世紀代の集落城が比較的広範囲に広がっていることが確認されている。

発掘調査は、平成 19 (2007) 年 8 月 23 日に調査機材を搬入し、パワーショベルによる表土層の除去作業から開始した。排土は、場内に仮置きして埋め戻すことが求められた。そのため調査区を解体したビルの基礎梁を境に東西に二分割して西側から着手した。

この基礎梁は、調査区の区分には有効であったが、反面調査の障害物にもなった。遺構は、南北の基礎梁を挟んで住居跡や土壌が比較的密に広がっていたが、基礎下で全容が把握できなかった。そのため東側の調査に当たっては、住居跡を残したまま表土層を除去した。また、東側の地形は南にもむかって緩やかに傾斜していた。のために排土量が膨らみ、駐車場用地にまで仮置きを強いられた。更に、調査の後半には、隣接するマンションの改修工事が重なり、工事用機械の仮置き場にもなって通路等の確保に難渋した。しかしながら、関係者諸氏の協力で予定より早い 9 月 25 日に無事終了した。改めて発掘調査に従事された人々の労苦に感謝します。

発掘調査の結果、奈良時代の堅穴住居跡 3 棟のほか掘立柱建物跡 5 棟、土壙 6 基と 3 基の土壙墓を検出した。堅穴住居跡のうち、基礎梁下にある 2 棟の住居跡は床面上の数 cm を残すのみであるが、南東隅の住居跡は深く、竈も良好な状態で遺存していた。このことから丘陵上線にあたる西側は大きく削平されている反面、東側の緩斜面は比較的旧状を留めていることが明らかになった。

遺跡名	次数	調査番号	所在地	調査面積(m <sup>2</sup> )	報告書	時期	遺跡の概要	主な出土遺物
麦野 C 遺跡群	1	8449	麦野 6-11-4	633	361	古代 (S C 中～後半)	奈良：住居跡、土壙	主な出土遺物
麦野 C 遺跡群	2	8904	猿田町 2-4	100	年報 VOL.4	古代 (7～8C)	奈良：住居跡	旧石器の石刃、扁平片刀石斧
麦野 C 遺跡群	3	9004	猿田町 3-14	242	501	古代	奈良：住居跡、土壙、佛	
麦野 C 遺跡群	4	9426	猿田町 2-3-6	265	807	古代	奈良：住居跡	
麦野 C 遺跡群	5	9856	麦野 6-12-5	871	643	弥生前末・古代	先史遺跡、堅穴住居跡、土壙墓、奈良・近畿・中畿・播磨	
麦野 C 遺跡群	6	140	猿田町 3-13-7	32	年報 VOL.16	古代？	柱穴	石臼、船舟石斧、淡灰陶器、鉄鎌
麦野 C 遺跡群	7	304	麦野 6-18-1	115	867	古代・近世	奈良：住居跡、掘立柱建物、土壙、矛としろ	
麦野 C 遺跡群	8	305	麦野 6-18-15	121	867	古代	奈良：住居跡、土壙、近世；井戸跡	
麦野 C 遺跡群	9	306	麦野 6-18-16	41	867	古代	奈良：住居跡、土壙、土	
麦野 C 遺跡群	10	509		677	897	古代、中後後半	奈良：住居跡、窓司；土	
麦野 C 遺跡群	11	731	竹三町 1-3-2-13	294	本報告	古代	奈良：住居跡、覆2柱柱建物、土壙、土壙墓	
麦野 C 遺跡群	12	746	麦野 6-15-3	203	970	弥生・中～近世	奈良：青銅丸、中～近世；井戸跡、土壙、土	
麦野 C 遺跡群	13	805	麦野 6-11-2			古代	奈良：住居跡、土壙	
麦野 C 遺跡群	14	835	東郷町 4-17-2-18-19	166			溝、柱穴	

Tab.1 麦野 C 遺跡調査一覧



Fig.6 遺構配置図 (1 / 100)

## 2. 竪穴住居跡 (SC)

竪穴住居跡は、調査区東半部で3棟を検出した。立地的には丘陵の東縁端から緩斜面上に占地している。この住居跡のうち、調査区の中央部に位置する2棟(SC-31・32)は床面から数cmを残して削平されている。これに対して緩斜面上にある住居跡(SC-33)の方が遺存状況はきわめて良い。これは丘陵上が著しく削平されていることを示し、本来的には丘陵上に竪穴住居域が広がっていたことが容易に想起されるが、その在り様や分布域は明らかでない。

### 31号住居跡 SC-31 (Fig. 7 PL. 1・2)

31号住居跡は、調査区中央部の北寄りに位置し、南へ5mの距離には32号住居跡がある。住居跡は東西壁の大半は搅乱層によって削平され、南壁は3号土壌(SK-03)と重複している。平面形は、南北長が330cmで東西長は290～300cmのやや小型の方形プランをなす。床面は、平坦で明らかな貼床は確認できなかったが、3号土壤の覆土上には薄い黄褐色粘土のブロック層があり、柔らかい床面を補強したことが想起される。主柱穴は明らかでないが、北東隔壁際に直径が25cm、深さが11cmの柱穴があり、隔壁に沿って柱穴を配した4本柱と考えられる。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がり、壁下に周溝は巡っていない。壁高は、著しい削平により5～12cmと浅い。遺物は、東壁側の床面上に須恵器壺や壺蓋、土師器壺のほかに鉄斧と環状鉄製品が散乱した状態で検出された。

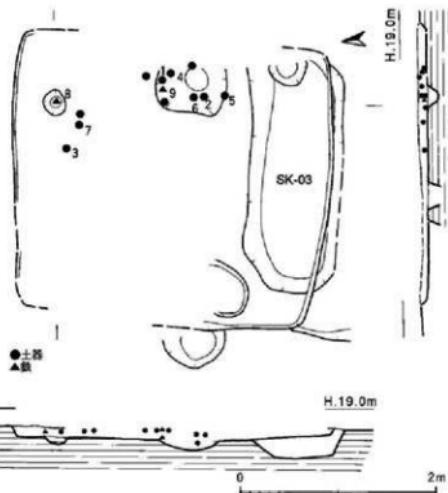


Fig.7 31号住居跡実測図 (1/50)

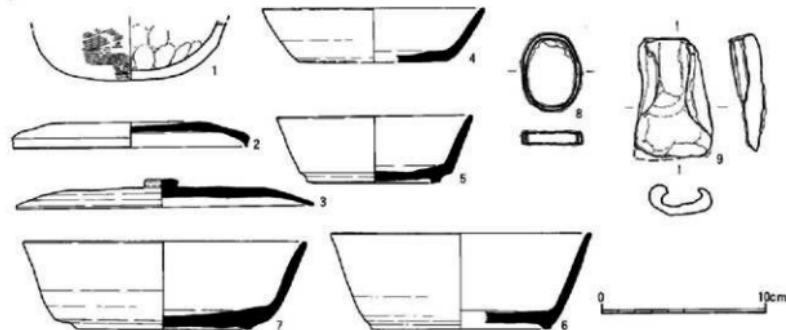


Fig.8 31号住居跡出土遺物実測図 (1/3)

## 出土遺物 (Fig. 8 PL. 9)

1は丸底の土師器壺である。外面がヨコハケ目、内面は指頭押圧ナデ調整で、外面には被熱による赤変がある。胎土には微細～小砂粒と雲母微細を多く含み、色調は淡黄橙色。2・3は須恵器壺蓋である。2は口径が14.4cm、器高が1.6cm。2は口径が14.4cm、器高が1.6cmで全体に歪みがある。口縁部は鋭く屈曲して下方に摘み出す。調整は口縁部がヨコナデ、天井部はヘラケズリ、内面はナデ。胎土には微細～小砂粒と雲母微細を含む。外面は淡灰褐色、外面は淡黒灰色。3は口径が18.2cm、器高が1.7cmで天井部には鉤状の摘みが付く。口縁部は天井部からストレートにのびて大きく開く。胎土には微細～小砂粒と雲母微細を含み、摩耗が著しい。色調は淡灰黄色。いずれも焼成は甘く軟質。4は口径13.6cm、底径9.2cm、器高が3.4cmを測る軟質の須恵器壺である。胎土は良質で微細砂と雲母微細を含み、色調は淡灰白色～淡灰色。5～7は高台の付いた須恵器壺で、口縁部はストレートに外反する。5は口径12cm、高台径10.1cm、器高は4.2cm。6は口径16cm、高台径11cm、器高は5.8cm。7は口径17.3cm、高台径10.6cm、器高は5.4cm。調整は全体～口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラケズリ。5・6の胎土は精良で微細砂と雲母微細を含み、焼成は堅緻。色調は灰色。7は胎土に小砂粒を含み、焼成はやや甘く軟質である。

8は長径が4.8cm、短径が3.5cm、厚さが2mm、高さが8mmの締め金具状の環状鉄製品である。9は長さが7.5cm、刃部幅が4.5cm、基部幅が3.6cm、厚さが1～1.3cmの鍛造鉄斧である。袋部は両側縁から8mmほど立ち上げた後7～10mm内側へ折り返している。

## 32号住居跡 SC-32(Fig. 9 PL. 3)

32号住居跡は、調査区の中央部の南寄りにあり、4.5m東には33号住居跡が位置している。住居跡は、緩斜面上の立地に加えて削平が著しいために南東壁が消失しているが、平面形は南北長が310cm、東西長は北壁が300cm、南壁が355cmでやや台形に近い方形プランを呈している。壁面は垂直に立ち上がるが、削平による消失が著しく壁高は5～10cmと浅い。床面は比較的固く締まっているが、明確な貼床は確認できなかつた。床面のほぼ中央部には直径が45～60cm、深さが20cmの梢円形プランをするピットがある。その壁面は被熱によって厚く赤変し、覆土中には炭粒片が、周辺域には灰と炭粒片が撒き出されたように散布しており灼跡と考えられる。また、東南壁際には直径が130cmほどの円形土壙が掘り込まれている。主柱穴は状況的に2本柱の可能性が想起される。覆土は黒褐色土の單一層で、床面上には須恵器と土師器の壺片と支脚のほかに鉄

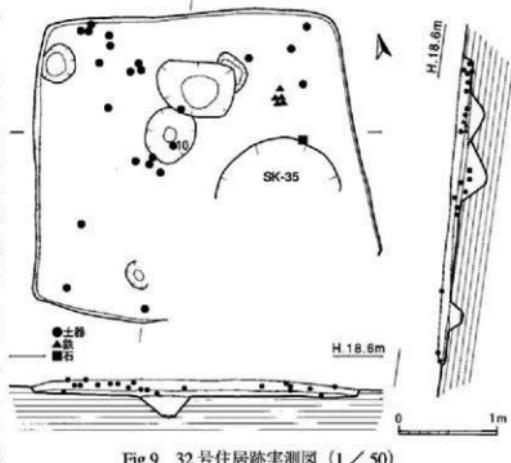


Fig.9 32号住居跡実測図 (1/50)

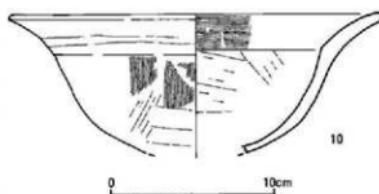


Fig.10 32号住居跡出土遺物実測図 (1/3)

滓が疎らに散乱していた。

#### 出土遺物 (Fig. 10 PL. 9)

10は口径が22.8cmの土師器鉢である。口縁部は偏球形の体部から緩やかに屈曲して大きく外反する。調整は口縁部内面がヨコハケ目、外面がヨコナナ目。体部は内面がヨコヘナナメのヘラケズリ、外面は上半がタテハケ目、下半がナナ目。胎土は良質で、微細～小砂粒と雲母微細を多く含み、焼成は良好。色調はくすんだ淡黄橙色。

#### 33号住居跡 SC-33 (Fig. 11 PL. 4・5)

33号住居跡は、調査区の南東隅部に位置し、立地的には丘陵が南へむかって緩やかに下っていく斜面上にある。西方へ4.5mの距離には32号住居跡が位置し、西壁の中央部は34号土壙墓によって削平されている。住居跡は、東壁が調査区外にあるが西壁から復原すると一辺が3.5mほどの方形プランをなそう。床面は、黄褐色粘土を5～8cm敷き詰めて貼床としており、柱穴に埋まれた中央部は固く凹レンズ状に隆んでいる。これに対して壁下はレヴェル的に高く、やや柔らかい。主柱穴は直径が40～50cm、深さが10～25cmの4本柱である。柱間は1.8mの北側に比して南側は南西の柱が南壁に近く全体として台形状をなしている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は北壁側が45cm、南壁側が20cmで壁下には幅が10cm、深さが3～5cmの周溝が巡っている。この西壁の中央部に竈を付設している。竈は、幅が60cmの煙道を55cmほど壁外に造り出し、この壁面に幅が10cm余りの灰褐色粘土を煙道壁に沿って弧状に貼り付けて補強し、粘土下は大きく袋状に抉入している。この抉入部の天井部には煤灰状の黒色土が薄く堆積しており、排煙の機能を高めている。この煙道は、火床から住居跡壁に沿って緩やかに立ち上がり、そこから斜坑状に30cmほど延びて地上へ排煙している。一方、住居跡内には馬蹄形に袖が巡っていたと考えられるが、右袖の一部を

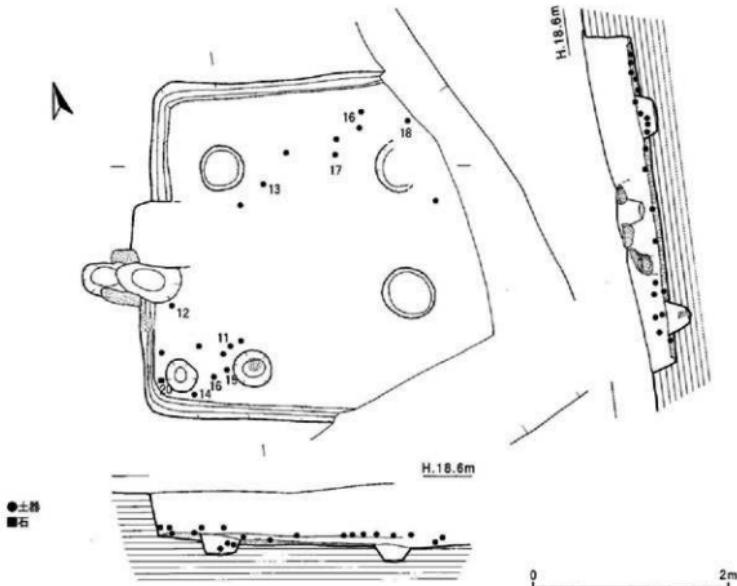


Fig.11 33号住居跡実測図 (1 / 50)

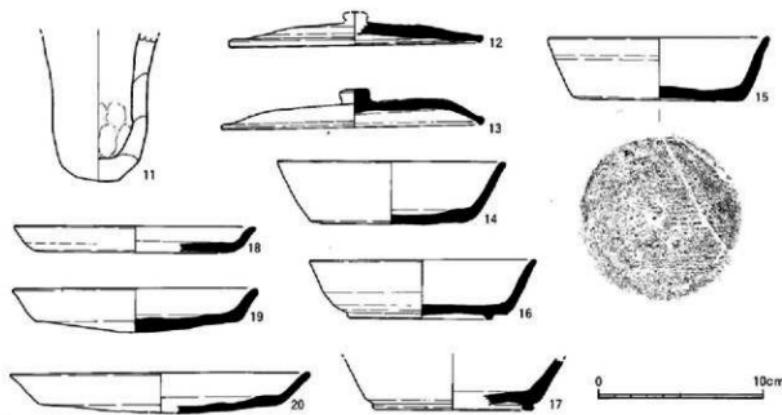


Fig.12 33号住居跡出土遺物実測図 (1/3)

除いて消失している。火床は凹レンズ状に浅く窪み、焼土壙の上には炭片の混入した黒色土が堆積していた。遺物は竈から南壁下の床面上に須恵器の壊や壊蓋のほか須恵器や土師器の壺片が比較的まとまって散乱していた。

#### 出土遺物 (Fig. 12 PL. 9・10)

11は土師器の手捏ね鉢。肉厚の口縁部は細い筒状の胴部から緩やかに屈曲して外反する。調整は指頭押圧ナデ。胎土には微細～石英砂と雲母微細を多く含み、焼成は良好。明赤橙色。12・13は天井部に釦状の摘みが付く須恵器壊蓋である。12は口径 15.4cm、器高 2.3cm。口縁部は低い天井部から水平に延び、端部は丸く納めて小さく下方に折り返す。口縁部がヨコナデのほかはナデ。胎土は精良で微細砂のほかに石英小～中砂粒と雲母微細を多く含み、焼成は堅緻。濃灰色。13は口径 16.1cm、器高が 2.3cm で歪みが著しい。口縁部は天井部から内縁気味に立ち上がり、端部は小さく内傾するように折り返す。調整は外面と口縁部がヨコナデ、天井部内面はナデ。胎土は精良で微細～小砂粒を多く含む。焼成はやや軟質で、淡明灰色。14-15は口縁部がストレートに外反する須恵器壊である。14は口径が 14cm、底径 9.3cm、器高は 3.9cm。15は口径 13.9cm、底径 10.4cm、器高は 3.7 ~ 4cm。調整は体部～口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラ切りで 15 には板目痕が残る。胎土は精良で微細～小砂粒と雲母微細を含む。焼成は甘く軟質。色調は 14 が淡灰色。15 は内面が灰黒～淡橙色、外表面は淡灰～淡黄橙色。16・17は高台の付いた須恵器壊である。16は口径が 13.9cm、高台径 8.9cm、器高は 3.7cm。口縁部は体部からストレートに外反する。17は高台径が 9.8cm、調整は体部～口縁部がヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラ切り。胎土は精良で微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は堅緻。淡灰～灰色。18～20は須恵器皿。18は口径が 14.8cm、底径 12.2cm、器高は 1. 6cm。19は口径 15cm、底径 12.7cm、器高は 2.7cm。20は口径 18.6cm、底径 14.7cm、器高が 2.5cm。口縁部は 18・19 が反り気味に、20 はストレートに短い体部から外反する。底部は中央部が凹レンズ状に窪む。調整は体部～口縁部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラ切りで 18・19 には板目痕が残る。胎土は精良で色調は淡灰～淡灰紫色。焼成は 20 が軟質のほかは堅緻。

### 3. 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物跡は、すべてで5棟を検出した。規模的にはいずれも1間×1間の小規模なものである。この1間×1間の建物跡が、床面が削平された住居跡の柱穴なのかあるいは建物跡なのかは即断できないが、形状や覆土を比較すると住居跡の柱穴とはやや異なり、建物跡と考えた方が妥当であろう。また、分布的には調査区全体に拡がっているが、狭小な調査区から全容は明らかでない。

#### 42号建物跡 SB-42 (Fig. 13)

42号建物跡は、調査区の東辺に位置する1間×1間の南北棟の建物跡で東桁行側は43号建物跡と重複している。梁行長は210cm、桁行長は240cmで床面積は5.04m<sup>2</sup>になる。柱穴は25～35cmの円形プランを呈する。深さは15～45cmであるが、緩斜面上の立地と削平を勘案すると50cm以上と考えられる。また、北西隅柱では直径が18cmほどの柱痕跡が検出された。

#### 43号建物跡 SB-43 (Fig. 13)

43号建物跡は、調査区の東辺にある東西棟の小型建物跡で、西梁行柱は42号建物跡の東桁行柱と重複している。建物跡規模は、1間×1間で梁行長は160cm、桁行長は240cm、床面積は3.84m<sup>2</sup>となり空間的にはきわめて狭小である。柱穴は、直径が30cm～45cmの円形プランで深さは現況で15～25cmを測る。

#### 44号建物跡 SB-44 (Fig. 13 PL. 6)

44号建物跡は、調査区の南西辺にある1間×1間の東西棟の建物跡である。梁行長は160cm、桁行長は260cmで、床面積は4.16m<sup>2</sup>になる。柱穴は、直径が25cm～40cmの円形で、深さは南柱柱が5～12cm、北柱柱が15～35cmで、北から南へ緩やかに傾斜するために北西隅柱がもっとも深い。

#### 45号建物跡 SB-45 (Fig. 13)

45号建物跡は、調査区のはば中央部に位置する1間×1間の東西棟の建物跡で、北西隅柱が調査区外にあり規則的に拡大する可能性も考えられる。梁行長210cm、桁行長は220cmではば正方形のプランで、床面積は4.62m<sup>2</sup>を測る。柱穴は直径が35～40cmの円～楕円形プランで、深さは28～45cm。掘り方はしっかりし、南柱柱には直径が15cmの柱痕跡が遺存していた。

#### 46号建物跡 SB-46 (Fig. 13)

46号建物跡は、調査区の南西部に位置する1間×1間の東西棟の建物跡で、梁行長は150cm、桁行長は240cm、床面積は3.15m<sup>2</sup>である。柱穴は、直径が35～45cm、深さが45～55cmを測る円形プランのしっかりした掘り方である。

### 4. 土 壤 (SK)

土壤は、すべてで5基を検出した。プラン的には楕円形と方～長方形のものに大別され、長方形プランのものは比較的深く掘り込まれ、機能的には墳墓的な傾向が窺える。これに対して円形プランのものは浅く、その機能も明らかでない。分布的には散逸的で、狭小な調査区の中央部に比較的まとまる傾向があるが、それが時期的あるいは形態的な差異によって生じるものか否かは明らかにし難い。

#### 1号土壤 SK-01 (Fig. 14 PL. 6)

1号土壤は、調査区の中央部西よりにある大型の土壤で、西へ2.5mの距離には28号土壤(SK-28)が位置している。平面形は長辺が440cm、短辺が210cmの不整形な長楕円形プランを呈する。全

土壤番号	規 模	梁行長	桁行長	梁行柱間	桁行柱間	主軸方位	緯 緒	床面積	備 考
SB-42	1間×1間	240		210		N-1°-E	南北	5.04	
SB-42	1間×1間	240		160		N-55°-W	東西	3.84	
SB-42	1間×1間	260		160		N-83°-E	東西	4.16	
SB-42	1間×1間	220		210		N-47°-E	東西	4.62	
SB-42	1間×1間	240		150		N-80°-E	東西	3.6	

Tab.2 掘立柱建物跡一覧表

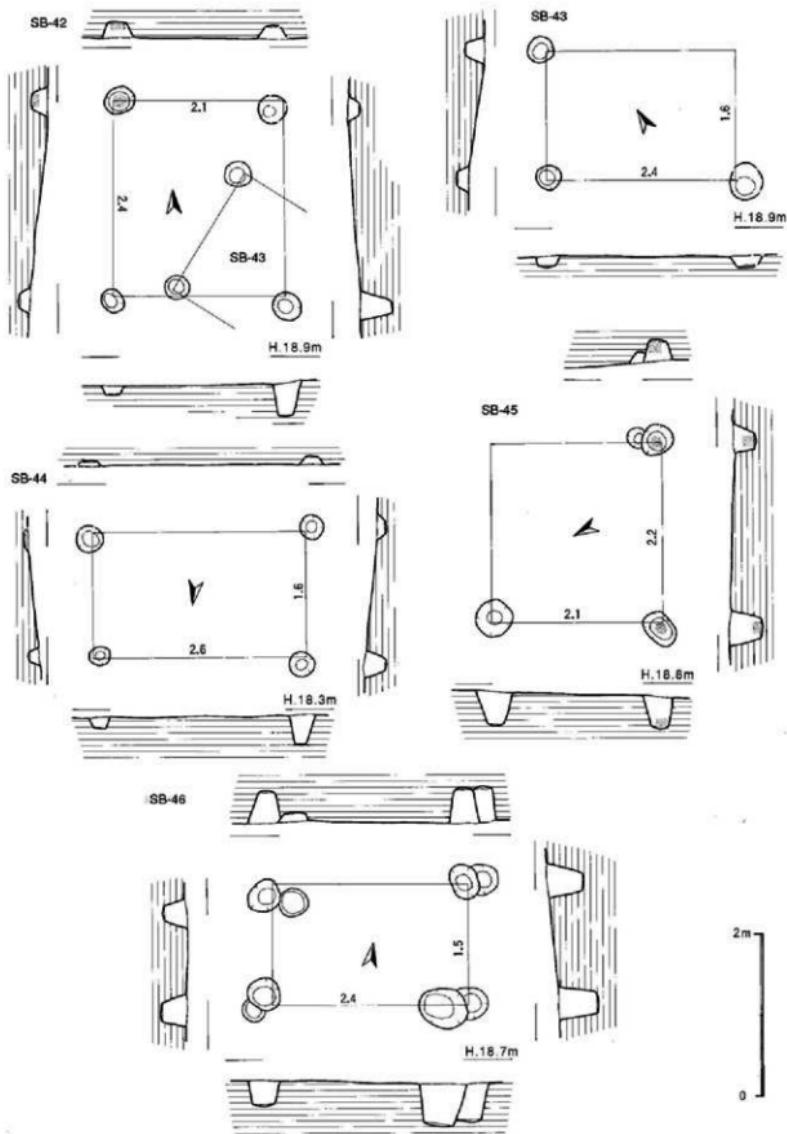


Fig.13 42 ~ 46 号建物跡実測図 (1 / 60)

体に削平が著しく、急峻に立ち上がる壁面は10~18cmと浅い。フラットな床面は中央から南北は小口壁に向かって緩やかに傾斜し、北壁との比高差は20cmほどある。覆土は黒色土に單一層で、平瓦片のほかに須恵器壺や壺蓋、土器器蓋と鉄片が出土した。

#### 出土遺物 (Fig. 15 PL. 10)

21は土師質の平瓦である。良質な胎土には微細砂と石英小~中砂粒を含み、測線はヘラ切りで面取りをしている。焼成は良好で、色調は淡黄橙色。

#### 2号土壙 SK-02 (Fig. 16 PL. 6)

2号土壙は、調査区の北西部に位置し、南へ3.5mの距離には1号土壙 (SK-01) がある。土壙は北半部が調査区外にあるためその全容は明らかでないが、平面形は、短辺が85cmの隅丸長方形プランで長辺は100~120cmほどにならうか。深さが70cmの壁面は、急峻に立ち上がり。壙底はほぼ平坦であるが壙央は浅い凹レンズ状をなす。標高は18.15m。遺物は出土しなかった。

#### 3号土壙 SK-03 (Fig. 16 PL. 7)

3号土壙は、調査区中央部に位置する東西軸の土壙で、31号住居跡の南壁際に重複し、住居跡よりも古い。東小口壁が削平を受けているが、平面形は主軸方位をN-73°-Eにとる短辺が86cmで長辺が250cmの隅丸長方形プランをなす。深さが18~25cmの壁面はやや緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。壙底は、東小口側が若干浅い段を作り、西小口壁側に小さく傾斜している。覆土は暗茶~黒褐色土で、須恵器壺や壺蓋のほかに土器器蓋、壺把手と移動式の竈片が出土した。

#### 出土遺物 (Fig. 17 PL. 10)

22は口径が14.8cm、器高が2.4cmの須恵器壺蓋である。天井部には径2cmの鉢状の摘みが付く。小さく摘み出した口縁端は外方に開く。調整は体部~口縁部がヨコナデ、天井部はヘラケズリ、内天井はナデ。胎土は精良で微細~小砂粒と雲母微細を含み、焼成は堅緻。色調は灰色。23は高台の付く須恵器壺で、高台径は9.8cm。体部は内縁氣味に外反し、疊付は小さく内傾する。調整は体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラケズリ。24は口径が18cm、器高が2.7cmを測る軟質の須恵器皿である。体部はストレートに開き、口縁部は小さく外反する。体部~口縁部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面には板目痕が残る。胎土には微細~石英小砂粒と雲母微細を含み、色調は淡灰色。25は移動式の竈。焚き口幅が32cm、高さは28cm、奥行きは26cm。鍔は、幅が6~7cmで断面形は凹レンズ状で、凹面を正面に向けて逆U字形をなす。体部の上位に牛角状の把手が付く。調整は、鍔部が指頭凹圧ナデ、

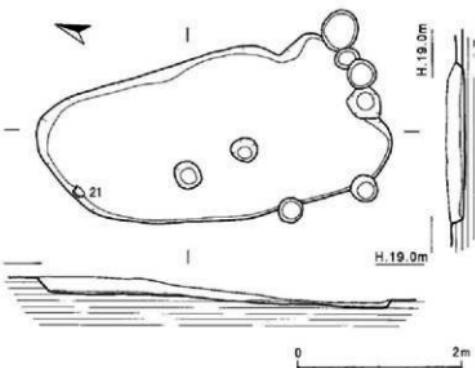


Fig. 14 1号土壙実測図 (1/60)

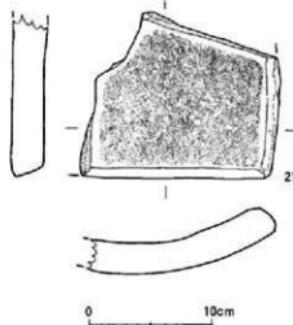


Fig. 15 1号土壙出土遺物実測図 (1/4)

外面がナデ後にハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は粗く、小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は暗赤橙色。

28号土壤 SK-28 (Fig. 16 PL. 7)

28号土壤は、調査区の中央部にあり、北小口側は3号土壤の削平を受けて消失している。平面形は、短辺が $62\text{cm}$ 、長辺が $170\text{cm}$ ほどの長方形プランを呈し、主軸方位を $N - 17^\circ - W$ にとる。深さは $21 \sim 27\text{cm}$ で側壁は急峻に、小口壁は緩やかに立ち上がる。壇底は平坦であるが、中央部は浅い凹レンズ状をなしている。標高は $18.4\text{m}$ 。形狀的に土壤墓の可能性も考えられなくはないが判然とはし難い。遺物は1点も出土しなかった。

35号土壤 SK-35 (Fig. 9)

35号土壤は、調査区の南端部に位置する円形土壤で、32号住居跡の床面下で検出した。土壤は基礎杭下

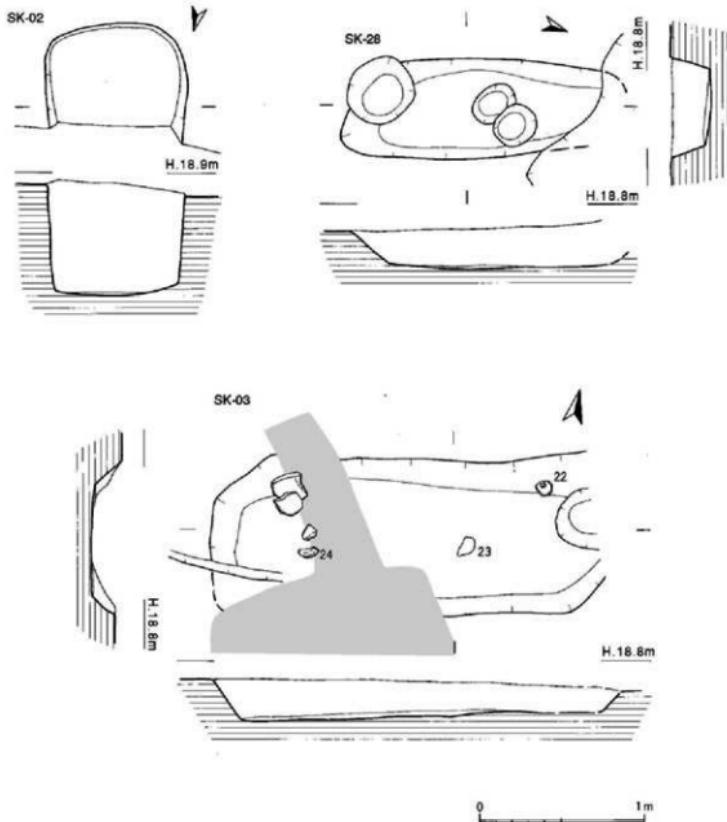


Fig.16 2・3・28号土壤実測図 (1 / 30)

にあり、北側の上縁を除いて完掘できず、詳細な形状や法量等は明らかでない。覆土は黒～暗黒褐色土の単一層である。遺物は土師器壺や須恵器片のはかに鉄鏃が1点出土した。

**出土遺物 (Fig. 19 PL. 10)**

26は角状の把手が付く丸底の小型鉢である。口径は14.6cm、器高は10.4cm。球形をなす胴部の中位には

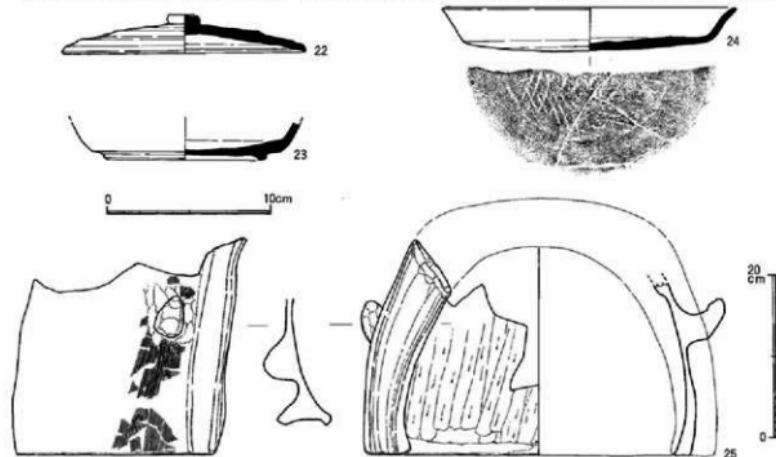


Fig.17 3号土壤出土遺物実測図 (1/3 · 1/6)

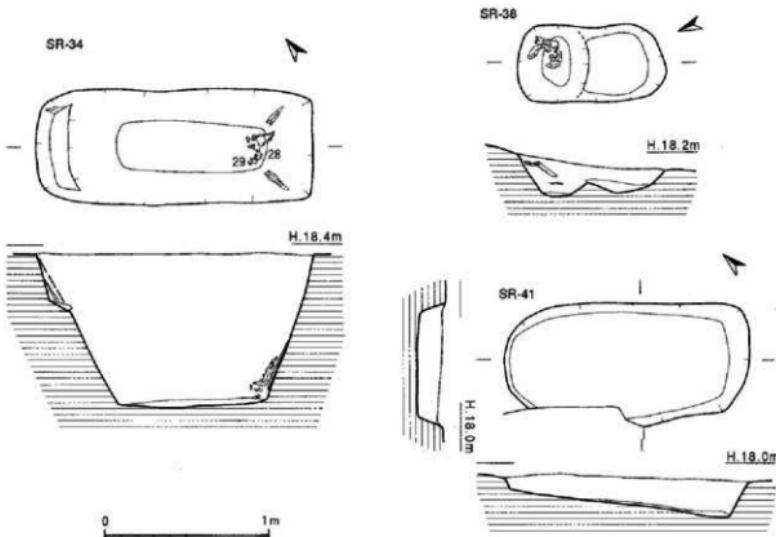


Fig.18 34・38・41号土壤墓実測図 (1/30)

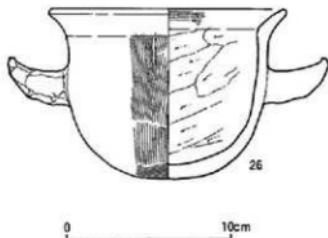
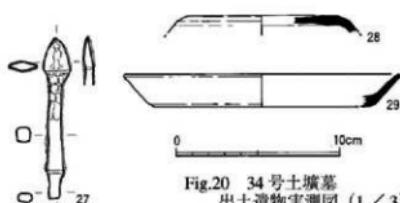


Fig.19 35号土壤出土遺物実測図 (1/3)

Fig.20 34号土壤墓  
出土遺物実測図 (1/3)

牛角状の把手が対称位に付く。口縁部は屈曲の弱い頸部から短く「く」字状に外反する。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケ目。胴部は外面がタテハケ目、内面はヘラケズリ。胎土は粗く石英小～中砂粒と雲母微細粒を含み、焼成は良好。内面は淡橙色、外面は淡黄褐色。

27は刃部幅が18mm、刃部長が20mmの鉄鎌で、茎の断面形は方～長方形をなす。

## 5. 土壙墓 (SR)

土壙墓は、すべてで3基検出した。占地的には丘陵が北から侵入する間折谷に向かって緩やかに傾斜していく緩斜面上に立地している。分布的には、狹小な調査区の南東部に小さな範囲にまとまる傾向が窺えるが、それが直ちに全体を物語っているとは云い難い。時期的には33号土壙墓と41号土壙墓が33号住居跡を挟んで切り合っていることを勘案すると、短い時間帯を考えることが出来る。

### 34号土壙墓 SR-34 (Fig. 18 PL. 8)

34号土壙墓は、調査区の南西隅にある33号住居跡の西壁上に掘り込まれた土壙墓で、北東隅壁は41号土壙墓の南側壁と重複し、3者の中で最も新しい。平面形は長軸が170cm、短軸が70cmの長方形プランをなし、主軸方位をN-48°-Wとする。深さが95cmの壁面は緩やかに立ち上がり、フラットな床面は墳央が凹レンズ状に浅く窪んでいる。両小口壁には、側壁に沿って幅が3～4cmの筋状の抉入痕がある。壁面に沿って側板を差し込んだ抉入痕が強く想起され、木棺墓の可能性が考えられる。東小口壁の床面上から骨片が出土したが、遺存状況が脆弱で取り上げることはできなかった。覆土は、上層が明黄褐色粘土ブロックの混入した灰褐色土、下層は黒色土である。

#### 出土遺物 (Fig. 20)

28は須恵器坏蓋の天井部である。胎土は精良で微細砂と雲母微細を含み、焼成は堅緻。灰色。29は口径が16cm、器高が2cmの須恵器皿である。口縁部はストレートにのびる体部から小さく外反する。口縁～体部はヨコナデ、外底面はヘラケズリ。胎土は精緻で若干量の微細砂と雲母微細を含み、焼成は堅緻。色調は濃灰色。

### 38号土壙墓 SR-38 (Fig. 18 PL. 8)

38号土壙墓は、調査区中央部の南壁際に位置する小型の土壙墓で、32号住居跡と33号住居跡の間の44号建物跡上にある。平面形は、長軸が91cm、短軸が47cmの長方形プランをなし、N-32°-Eに主軸方位をとる。床面は南小口壁がやや浅く、一旦立ち上がった後に北小口壁に向かって再び深くなる2段掘り状



Fig.21 包含層出土遺物実測図 (1/3)

の構造をしている。断面形は浅い舟底状をなし、1段目の南側は深さが16cm、北側が26cm。この北小口壁に沿って大腿骨様の骨片が出土し、覆土も34号土壤墓と良く似た灰褐色土の單一層のため土壤墓としたが、方形ピットの重複の可能性も否定できない。遺物は骨片を除いて1点も出土しなかった。

#### 41号土壤墓 SR-41 (Fig. 18 PL. 8)

41号土壤墓は、調査区の南西隅に位置する33号住居跡の中にある。土壤墓は33号住居跡の床面上で検出したもので、その南西壁は34号土壤墓に削平されており、41号土壤墓・33号住居跡・34号土壤墓の順で開削されている。平面形は、長軸が150cm、短軸が70cmの開丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-40°-Wにとる。壁面は南小口壁がやや緩やかなほかは急峻に立ち上がる。床面は平坦であるが、北から南へ向かって傾斜し、壁高は北小口壁が8cm、南小口壁が22cmで14cmの比高差がある。覆土は黒色土の混入した明橙色粘土ブロック層で遺物は1点も出土しなかった。

### 6. その他の遺構と包含層出土の遺物

調査では、竪穴住居跡や土壤墓と土壤のほかに大小のピットを検出した。ピットの中には柱痕跡が明瞭に残り、掘立柱建物跡の柱穴としてまとまるものとひとつの遺構としてはまとまらない柱穴があり、後者は緩斜面上の立地と調査区の狭さに起因すると考えられる。また、緩斜面上には暗茶褐色～黒褐色土の遺物包含層が堆積していたが、遺物は小片が多く量的には少ない。

#### 出土遺物 (Fig. 21)

30は包含層から出土した高台径が10cmの須恵器壺である。長胴形の胴部にやや高い高台が付く。胎土は精良で若干量の雲母微細と小砂粒を含む。焼成は堅密で、色調は外側が灰色、内側は淡赤橙色。

### III. おわりに

第11次調査では、古代の竪穴住居跡3棟のほかに掘立柱建物跡、土壤墓、土壤などを検出した。ここで明らかになった成果を簡単に整理し、後途に託したい。

調査地は、立地的には東から侵入する谷に面した緩斜面上にあり、周辺の調査や試掘の所見では遺構の稀薄なところと考えられていた。しかしながら、予測に反して複数の竪穴住居跡を検出した。このことは散期の集落域が丘陵の南縁にまで展開していたことを意味する。この時期の集落域の中心は、西鉄椎崎限駅の東部域にあり、第1次調査区や第13次調査区などでは70棟以上の住居跡群が重複しながら濃密に展開している。この地は、麦野C遺跡を載せた丘陵の中央部に位置するが、第1次調査区や第13次調査区は北東から侵入する開析谷に近く、谷を挟んで麦野B遺跡と対峙する位置にある。この占地条件は本調査区と符合するものがあり、占地による集落域の展開と消長、そして集落間の優劣を検討する必要があろう。本調査区で検出した住居跡は3棟に過ぎないが、緩斜面の下方に位置する33号住居跡の連存状況に比べて、その上縁に位置する31・32号住居跡は大きく削平されている。この近在は、近世以降の開発に伴って大きく削平されており、本来的にはもっと多くの住居跡があった可能性も否定できない。このようにこの期の集落域は、ひとつずつ丘陵上において核となる集落域とそれを取り巻く衛星的小集落域がある。これは西方の南八幡遺跡や西南方の雜鈴限遺跡でも同様の傾向が窺われる。今後は、各遺跡（丘陵）間の集落域の消長と関わりを検討することが求められる。また、本調査区でもひとつの住居跡から硬質の須恵器と軟質の須恵器が供伴している。これが麦野丘陵に在る集落の特徴なのかあるいは別に何らかの要因が在るのか検討を要する事項である。

# PLATES



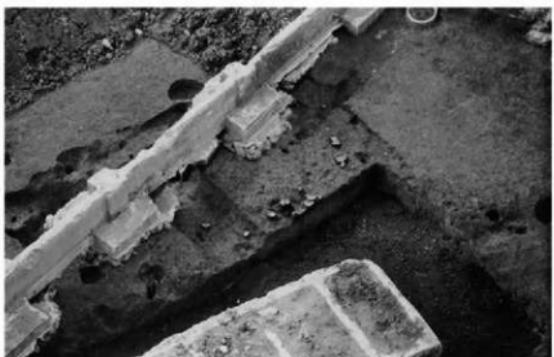
調査区全景（南より）CG 合成



(1) 調査区西側全景（南より）



(2) 調査区東側全景（南より）



(3) 31号住居跡・3号土壤全景（東より）



(1) 31号住居跡全景（南より）



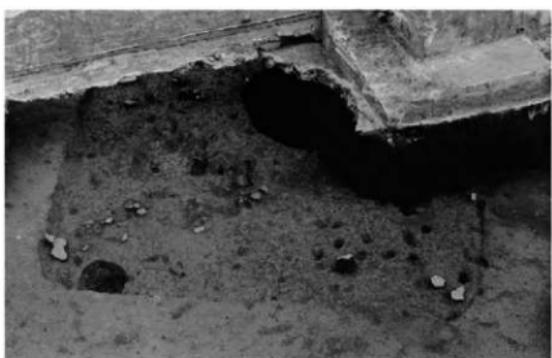
(2) 31号住居跡遺物出土状況（西より）



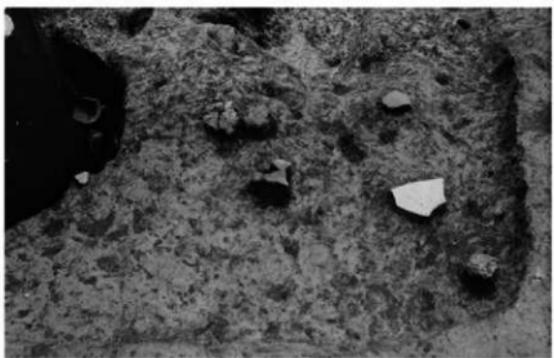
(3) 31号住居跡遺物出土状況（西より）



(1) 32号住居跡全景（南より）



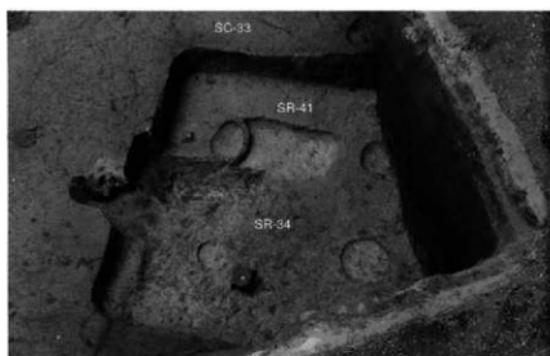
(2) 32号住居跡全景（西より）



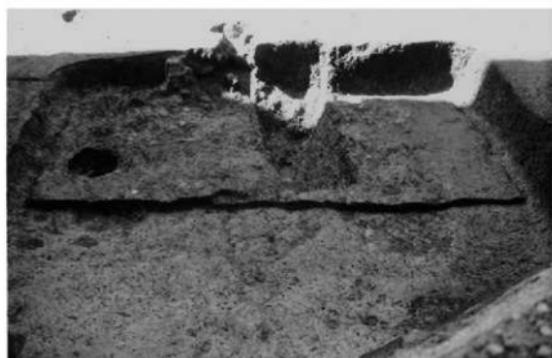
(3) 32号住居跡北西隔壁遺物出土状況（東より）



(1) 33号住居跡全景（東より）



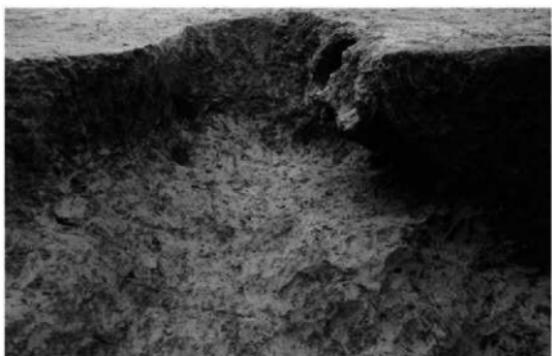
(2) 33号住居跡掘方（南より）



(3) 33号住居跡貼床断面（東より）



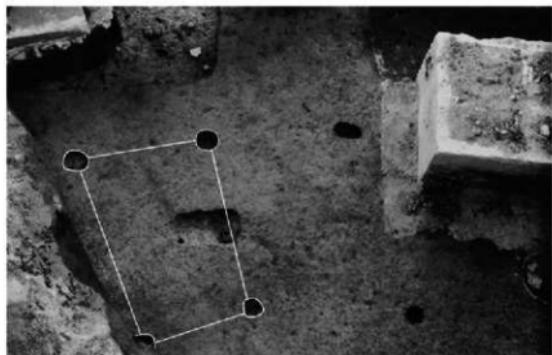
(1) 33号住居跡竪横断面（東より）



(2) 33号住居跡竪完掘状況（東より）



(3) 33号住居跡南西隅遺物出土状況（南より）



(1) 44号掘立柱建物跡全景（東より）



(2) 1号土壤全景（南より）



(3) 2号土壤全景（南より）



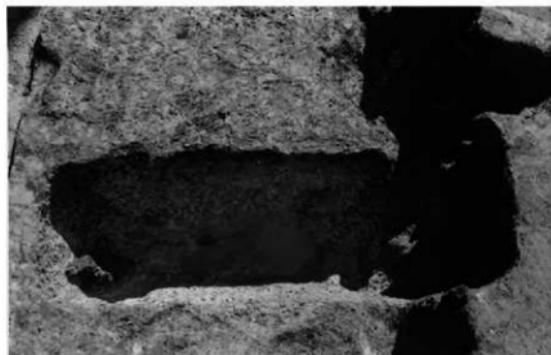
(1) 3号土壤全景（北より）



(2) 28号土壤全景（東より）



(3) 35号土壤全景（東より）



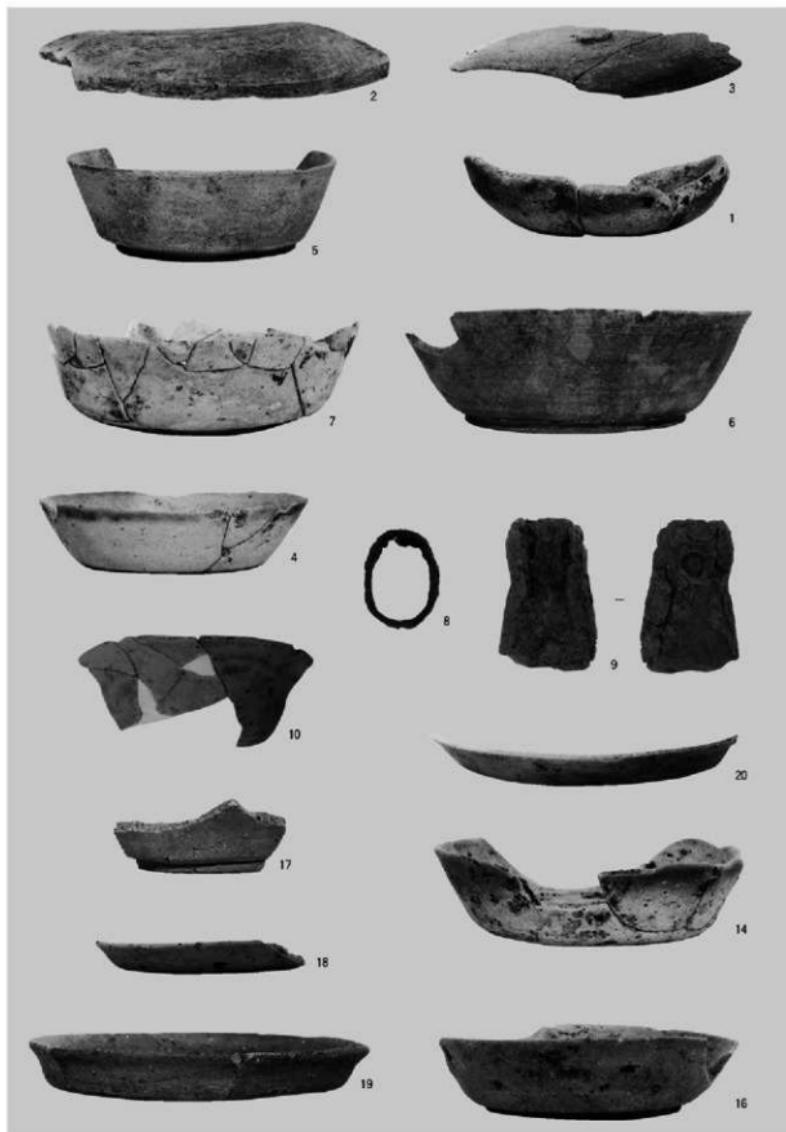
(1) 34号土壤墓全景（北より）



(2) 38号土壤墓全景（西より）



(3) 34・41号土壤墓全景（南より）



出土遺物 1 (縮尺不同)



出土遺物 2 (縮尺不同)

## 報告書抄録

ふりがな	むぎの C いせき							
書名	麦野C遺跡							
副書名	麦野C遺跡第11次調査報告							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
発行機関	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
麦野C遺跡 第11次	福岡市博多区 竹丘町2丁目	40130	0050	33° 32° 38°	130° 27° 48°	2007082 ~ 20070925	294	社屋建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
麦野C遺跡 第11次	集落	奈良時代	堅穴住居跡 建物跡 土壙墓 土壙	土器器、須恵器、 鉄器				

---

## むぎの 麦野C遺跡

—麦野C遺跡第11次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 集

2009(平成21)年3月20日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社 宣技堂  
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-47